

2022年5月15日 説教「滅びることのないもの」

マタイの福音書 24章 29～35節

5月はマタイの福音書 24章から、終わりの日について学んでいます。今朝もイエスが教えられた終末の出来事からともに考えます。

1. 終わりの日の出来事 (29～31)

- ①天の万象は (29)「だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。」終わりの日が近づくと、戦争の知らせ、飢饉、地震、疫病、迫害、憎み合い、不法がはびこり、愛は冷えます。「荒らす憎むべきもの」は聖なる所に立ち、荒らし始めます。そして、それまでになかったようなひどい苦難があるのです。地上的には、その苦難からは逃げるしかないのです。偽キリスト、偽預言者が横行します。惑わしの情報も行き交います。そして、これらの苦難の後には、本当の終末へ進んでいきます。天体に異常が生じるのです。地球に光と適切な温度をもたらしている太陽が暗くなるのです。人間や動物や生物が生存するのに決定的な問題が生じるのです。月も光を放ちません。太陽からの光を十分に受けられないからでしょう。天の浮かぶ星の中には、秩序を保つことができず、落ちてしまうものが出てくるのです。天体のあちらこちらに不秩序が生じてくるのです。天体学者達や物理学者達も予測できないような事態が生まれてくるのです。
- ②天の雲に乗って (30)「そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。」ここまで来て、キリストの再臨の時が来るのです。「人の子」という表現は、メシヤ(救い主)を現わす言葉です。まずは、再臨のしるしが天に現れるのです。誰もがそのことを認めるようなしるしなのです。そして、地上のあらゆる種族、民族の者達が、人の子(救い主)が大能と栄光を帯びて、天の雲に乗って来るのを見るのです。エリヤは天にたつまきに乗って上っていくことになりましたが(Ⅱ列王2章)、再臨の主は天の雲に乗ってやって来られるのです。それを地上にいる人々が見ることになります。ある者は天上や地上の物が失われていくのを見て悲しみます。
- ③選びの民を (31)「人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。」人の子(救い主)は、大きなラッパが奏でられるような響きをもって、御使いたちを遣わされます。その響きは聖霊降臨の出来事を彷彿とさせられます。再臨の主は御使いたちを用いて、天の果てから果て、四方八方から選民たちを集められるのです。御使いたちは救い主の誕生、復活の時と同様に用い

られています。

2. いちじくの木から学ぶこと (32~33 節)

- ①いちじくの木 (32)「いちじくの木から、たとえを学びなさい。」イエス・キリストはその宣教において、たとえ話を随時なさっています。それらの中には、芥川龍之介が最高の短編小説とした放蕩息子のたとえ話もあります。今ここで、終わりの日について語るために、主イエスはいちじくの木を題材としてとりあげられます。いちじくの木は、イスラエルには大変多く、その実は生で食べられることもあれば、乾燥して食することもありました。
- ②枝が柔らかく (32)「枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。」そのいちじくのたとえです。いちじくは、その枝が柔らかくなり、葉が出てくると、夏が近いと、人は察知します。これは夏イチジクで、3~4月に青い実をつけ、6~7月に熟するということです。たとえ話は実のことではなく、枝と葉を見て季節を理解することを例えて用いています。
- ③人の子が戸口に (33)「そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。」たとえ話から学ぶことは、いちじくの花や葉を見て季節を人々が察知するように、終わりの日の様々な前兆を見た時には、人の子(救い主)が再臨するために、戸口までこられていることを察知しなさいというのです。

3. 天地と滅びと主のことば (34~35 節)

- ①全部が起こるまでは (34)「まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。」まことに(アーメン)あなたがたに告げます、という文面から重要なことが語られようとしていることがわかります。つまり、これらのことが全部起こってこそ、時代の終わりが来るのであって、それが済まないうちは、時は満ちていないのだということが言われています。というのも、再臨の日がすでに来たとか、終わりの日は目の前なのだからと、堅実な生活をしないでいる人々にパウロはいうのです。「主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。」(第一テサロニケ2:2)とありますが、終わりの日は来ますが、ことをよく見極めなければならぬのも確かです。
- ②天地は滅び (35)「この天地は滅び去ります。」いかに太平に見えても、いかに鉄壁に見えても、いかに崩れそうもないに見えても、その時が来ると、この天地は滅び去るのです。単に建物が倒れるといったことではなく、天と地の根幹が滅び去る時が来るのです。
- ③主のことばは (35)「しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」。天地が滅び去ったとしても、滅びないものがあります。

それはイエス・キリストのことばです。キリストは神です。そして、神のことばは永遠だからです。それは崩壊したり、滅亡したり、腐ったりすることはないのです。生きて働くのです。

《結論》

今朝の聖書箇所にはいくつかの重要なことが記されています。いよいよ終わりの日が来る時には、①天体の異変があること。②再臨のキリストが来られること。③選びの民が集められる、というようにどれもしっかりと覚えておかなければならないことが列挙されています。そして、これまで記されてきたことをも含めて、キリストはいちじくの木のとえ話を通して、キリストの再臨が近づいていることを察知せねばならないと教えてくださっていて、貴重です。また、終わりの日の出来事は全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去らないという注意事項も、焦りやすい者たちにとっては、しっかりと心にとめておかなければならないことなのです。

こうしたことを踏まえた上で、今朝は35節「この天地は滅び去ります。」という御言葉から特にまとめとして考えたいと思います。」

さて、人々は日常生活において、金や銀やダイヤモンドといった貴金属の類を、衰えることのない価値ある物としてとらえています。そして、それらを持つ者は自分の生存を支えると考え、拠り所とします。確かに平穩の時代には、それらがその人の経済生活を守るのに役に立つでしょう。しかし、終わりの日が来る時、それらの価値はなくなるのです。持っていたても、それらはその人を支えることはできないのです。また、宇宙をどこまでも続く永遠に近いものとしてとらえる向きがあります。しかし、その宇宙とて永遠ではありません。有限なのです。天体の創造主のわざは、無から有の創造でした。今ここで主が、「天地は滅び去ります」と言われているのは、主ご自身がお造りになった、有なる物が滅び去る時なのです。宇宙のどこかが、平然と残っているといったことではないのです。得体のしれない、ブラックホールもろとも、失われる時なのです。終わりの日というのは、そのように徹底した終わりなのです。そうした緊迫のなかに、主は再臨し、選ばれた者たちを集めてくださるのである。

それではこの地上において、永遠に関係するものはあるのでしょうか。キリストは「わたしのことばは決して滅びることがありません。」と語られました。天地が滅び去るなかで、永遠へとつながっていくものは、意外かもしれませんが、主のことばだと言う

のです。そういえば、主が創造の御業をなさった時も、「光があれ」と述べられると、光が創造されました。主のお言葉によってすべては造られていきました（創世記 1 章）。また、「初めに、ことばがあった」（ヨハネ 1:1）とあります。ここの「ことば」はロゴズであり、「言葉」だけの意味ではありませんが、創造主と「ことば」とは深いかわりがあったのです。

今日、神の言葉は「聖書」というかたちで私達に備えられています。聖書の御言葉に日々親しまれている方は、永遠につながる価値あるものに関係しておられることになります。滅びることのない御言葉を、日々においていきましょう。そのことは永遠の主イエス・キリストの神、聖霊なる神につながっていくことでもあるのです。